

大学生の職業決定と親子関係との 関連性についての面接調査

鹿 内 啓 子

大学生の職業決定と親子関係との関連性についての面接調査

鹿内啓子

目次

- I 問題・目的
- II 方法
- III 結果
- IV 考察

I 問題・目的

大学生の職業決定と関わる要因を検討している研究は数多いが、その中には親の影響を扱っているものがある。青年がどのような職業意識を形成しているのか、職業決定がどのような過程をたどってどのような状態にあるのかはアイデンティティ確立の状態と大きく関わっている。青年の親との関係のあり方が青年のアイデンティティに影響し、それを通じて間接的にキャリア発達に影響すること、職業人としての親をどのように認知するかを通して直接キャリア発達に影響を及ぼすことの2つの方向が考えられる。

青年の職業意識に対する親の要因の影響に関するこれまでの研究をみると、大きく3つの分野に分けられる。その1つは親から子どもへの職業の継続性に関する研究である。田中・小川(1985)および北原・佐々木・岡部(2005)では、専門職について親から子どもへの職業の継承性が強いことが示されている。また高井(2001)は、大学生を対象に、職業の継承がその背後にある価値観や生き方という基本的なものの継承を伴っていること

を示した。

2つ目は、就職活動と親のサポートを扱った研究である。牛尾(2005)は、文系の大学4年生を対象に、男女とも家族の中では就職についての相談相手として母親がもっとも選ばれるが、男子では父親も同程度に相談相手になっていること、就職状況の親への伝達頻度は男子より女子で高いことなどを明らかにした。そして上村(2005)では、就職活動状況を親に伝達する頻度が高い方が就職活動の量が多く、また内定を得ている率も高く、さらに親のアドバイスが多いほど、就職活動全体への自己評価も高かった。

3つ目の分野は親子関係の様相と青年のキャリア発達との関係を扱ったものである。Lopes,E.G. & Andrew,S(1987)は、職業決定不能(career indecisive)の大学生に対する臨床経験から、親と青年との過剰な相互関与やその他の家族パターンの機能不全が青年の個体化のプロセスを妨げ、決定不能をもたらしているという。職業決定不能は、親子分離による家族不安を軽減し、家族システムの葛藤を回避し、自分と相容れない親の期待によるストレスから青年を守るという機能をもつ、と述べている。Wolfe,J.B. & Betz,N.E.(2004)は、父親・母親との関係および他者へのアタッチメントスタイルと職業決定自己効力感および職業へのコミットメントに対する恐れとの関連を大学生で検討した。コミットメントに対する恐れは職業を1つに決定することへの恐れや不安であり

キーワード：大学生, 職業決定, 職業意識, 親子関係, 父-娘関係

職業決定不能のことである。その結果、アタッチメントスタイルはコミットメントへの恐れと関連していたが、親との関係については、女子大学生で母親との良い関係が職業決定自己効力感の高いこと、およびコミットメントへの恐れが低いことと結びついてきたが、父親との関係には関連性がみられず、また男子大学生では両親との関係はいずれも職業意識と関連していなかった。Lease, S. H. & Dahlbeck, D. T. (2011) は、大学生の職業決定自己効力感と親へのアタッチメントおよび養育態度との関連を検討した結果、女子では母親へのアタッチメントは自己効力感と正の関連を示したが、男子では有意な関連がみられず、また父親へのアタッチメントは男女とも自己効力感との関連を示さなかった。Wolfe, J. B. & Betz, N. E. (2004) でも Lease, S. H. & Dahlbeck, D. T. (2011) でも、女子では母親との望ましい関係が高い職業意識と結びついてきたが、父親との関係は男女いずれでも大学生の職業意識と関連していなかった。

高橋 (2008, 2009) では、大学1年生の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連を検討した結果、男女共通して、親が子どもに理解や応援をしてくれるという「結合性」の認知、および青年自身が自分の希望を説明したり説得したりする「議論による立場の明確化」は高いアイデンティティと結びつくが、青年が親との話し合いを避けようとする「議論の回避」はアイデンティティの低さと関係していた。しかしこれらの関係は比較的弱いものであった。

鹿内 (2012) では、父親と母親それぞれとの関係を、尊敬したり将来を考えるときの参考になるなどの「モデル」、将来を話し合う、期待を感じるなどの「対話」、指図される、今の自分に不満をもっているようだなどの「圧力」の3因子に分類し、職業未決定状態との関連を検討した。その結果、男子学生については親との望ましい関係が職業への構

えにポジティブな効果をもっていたが、女子学生については親との望ましくない関係が職業未決定と結びついてきた。このように大学生の職業意識の発達に対して父親および母親との関係の認知は、性別によって異なる影響をもつことが示された。

青年の職業意識の発達のプロセスには、大学進学を考える時や就職が視野に入ってくる時期など共通の節目があるが、個々人の経験、性格、青年を取り巻く人々などの影響によってそれぞれの進み方がある。将来を決める時期の早さだけでなく、決定に至るプロセスや決定に影響する事柄も個人によって異なる。また親子関係についても、青年の場合はこれまでに築かれてきた関係があるため、単にコミュニケーションの量だけでなく、それぞれどのような事柄を相手に話しそれを聞き手がどのように受け取り、どのように対応するかというような質的な側面を検討する必要がある。大学でのキャリアガイダンスを考えた時、様々な個人のキャリア発達のプロセスを明らかにした上で、決定に至る、あるいは決定がうまくいかないパターンについていくつかの類型を導き出すことが有効であろう。

本研究では面接を行い、希望進路、希望するに至った過程、仕事に対する構えに影響を及ぼした要因、親との関係を尋ねることによって、個々のケースの職業意識の発達の様相を親、主に父親との関係を中心に比較検討をする。なお同じ協力者に継続して面接をお願いしているが、ここでは初回の面接の結果だけを報告する。

Ⅱ 方法

面接協力者：文科系大学の男子学生4名、女子学生10名、合計14名。学年は2年生10名、3年生1名、4年生3名である。筆者が2011年度に担当した授業の受講生の中で、面接の協力要請に応じてくれた方である。

面接時期：2011年8月～9月

面接状況：筆者の研究室で対面の位置で行った。所要時間は1人50～70分であった。協力者の許可を得た上で、ICレコーダーで録音をした。

面接内容：以下の質問項目を柱に半構造化面接を行った。

- ①卒業後の希望進路
- ②そのきっかけとそれについての情報の入手状況
- ③2つ以上の希望進路がある場合は、1つに決めていく時期や決め方の見通し
- ④進路についての親の態度および親の希望の有無
- ⑤親自身の仕事についての会話の有無と内容
- ⑥アルバイトの状況とそこから学んだこと
- ⑦仕事をする上でのモデルの有無
- ⑧社会人に必要な条件
- ⑨仕事をする目的
- ⑩将来仕事をする時に心掛けたいこと、またやらないようにしたいこと

Ⅲ 結果

1. 希望進路とそのきっかけ

教員を進路の1つに考えている者は14名中8名であった。面接協力者を教職科目の授業の受講生の中から募ったため、教員志望者が大きな割合を占めることになった。学年別に見ると、2年生10名のうち希望進路をほぼ1つに絞っている者は4名であったが、その内訳は特別支援教員が2名、福祉施設が1名、一般企業が1名である。まだ1つに絞っていない6名は全員が2つの進路の間で迷っており、方向性が見えていないという未決定状態の者はいなかった。2年生10名中7名が、特別支援教員、カウンセラー、福祉施設職員という人の支援に関わる職業を視野に入れているのは、9名が社会福祉学部所属であることから肯ける結果である。3年生の1名はまだ進む方向を見いだせないでいる。4年生の3名については、1名は一般企業への就職活動中、1名は公務員の採用試験を受験中であ

り、まだ就職先は未決定ではあるが方向は定まっている。しかし他の1名は、就職活動をしてきたもののここに来て迷い始め、今立ち止まっているところであった。

次にこのような進路を考えるに至ったきっかけをみってみる。特別支援教員、福祉施設職員、カウンセラーといった広く福祉関係の仕事を視野に入れている8名についてみると、「小学校から障害をもった友だちがいた」、「小学校からの仲良しが不登校から鬱になった」など自分の直接的な体験から人を支援する仕事に就きたいと思ったという志望動機を挙げている者が5名であった。また大学入学後にボランティア、大学の授業、資格のための実習で障害児やその母親と関わる機会があり、その経験で福祉への志向性を強めたと述べる事例が3例あった。このように福祉関係への進路希望には、身近に支援を必要とする状況があったり、そのような場を見聞することの効果大きい。また3名についてはきょうだいや親戚に福祉関係の仕事をしている人がいた。いずれも頻繁に会って情報を得るような関係ではないが、身近に仕事をしているモデルがいることによって福祉に興味をもつきっかけになったり、進路を考える際の情報を得たりしていた。

次に教員志望のきっかけをみってみる。社会科と特別支援を合わせて教員を進路の1つに考えている8名のうち5名が、小・中・高のいずれかで出会った教員の影響を挙げている。特定の教師への尊敬や憧れの場合もあれば、「授業している先生の姿がかっこ良かった」というように、教師そのものへの魅力を感じている場合もあった。他の4名のうち1名は、積極的な教員志望ではなかったが、教員であればこうなりたいというモデルは中学校のときの担任教師であった。福祉関係への志望と同様に、教員の場合も自分の直接の経験が大きな力をもっている。また親が教師であるケースはなかったが、親戚に教師がいる

ケースがあった。この場合教師にまつわる様々な話しを聞いているがそれが直接教員志望につながっているわけではないという。しかし目標になり得る選択肢が多くある中で「・・・他のものよりも具体的に見えていたからそれに決めたかなっていうのはあるかもしれない」と述べているように、その職業に携わっている人が身近にいることによって職業のイメージが形成されやすく、選択肢の一つとして浮かび上がるということは十分考えられる。

2. 進路に関する親・家族との関係

親が希望進路を知っているのは13名であり、1名は特に話していないということであった。このうち、父親が相談相手で母親は特に何も言わないというケースが3名、逆に父親は何も言わず、母親と話すケースが5名、どちらも相談しているものは5名であった。軽いやりとりをするだけのケースから、「ずっと相談している」というように両親との相談を判断の拠り所としているケースまで相談の程度はさまざまである。しかしこのように相談の頻度もまた親の意見が本人にとってどの程度重要であるかもさまざまではあるが、ほとんどが進路について親と話をしている。

このような相談の中で親はどのような対応をしているのだろうか。本人の意思を尊重するという基本的態度を親がもつと学生が認知している場合が11名ともっとも多い。他の3名については、一般企業への就職、福祉の職、専門学校への進学をそれぞれ勧められている。しかしこの3名の場合もアドバイスという程度であり、決めるのは本人という姿勢である。また親が勧める進路は学生本人が1つの選択肢として考えているものであったり、親からの提案であっても本人に受け入れられて魅力を感じる進路となっている。したがって学生本人の意思と親の希望が対立するケー

スはなく、親の希望は1つの意見や情報として考慮すべきものと受け取られている。

3. 仕事・生き方についてのモデル

仕事をしていく上で、あるいは生き方そのものについて、自分のモデルになる、共感できる人を、身近な人、これまでに出会った人、マスコミに出る人、芸能人やその他の有名人など広い範囲から挙げてもらった。特定の人物を挙げなかった4名は男子2名、女子2名であったが、このうち3名については、他者のもつ特定の特性や態度に魅力を感じても人物全体に魅力を感じることはないということであった。

父親だけを単独で挙げている3名は男子1名、女子2名であった。仕事をしていく上でのモデルであったため、女子学生にとっても父親が対象になったと思われる。母親だけを単独で挙げた者はおらず、両親を挙げたケースについても、母親に関しては「・・・家庭と職場でしっかりと分けられるような人になりたいなどはほんとに思う」というように、仕事に対する姿勢だけでなく、さまざまな役割をしっかりと果たしている母親の生き方そのものへの尊敬がみられる。

アルバイト先の職場の人を挙げている2つのケースでは、そのような人たちの実際の働き方をみて多くのことを学んでいる。1人はアルバイト先の店長を挙げ、「そのような人にいつかになりたい。他の職場に行ったときに必要とされる人にはなりたいと思った」と述べ、また「ただ与えられた仕事をやるのは作業でプラスαで何かをして初めて仕事になる」という店長の教えが心に強く残り、今もそれを心掛けて働くようにしていると、店長の影響の大きさを述べている。実際にそれを心掛けることで、他のアルバイト先で働きが評価されているという。また別のケースでも職場の人をモデルとして同様の学びをしている。パートの主婦の方が学生アルバイトと

は比べ物にならないような高い仕事意識をもち、仕事が手早い上にお客が心地よく過ごせるように決められた仕事以上のことに絶えず心配りをしているという。それを示す具体的なエピソードも語っていた。仕事の現場で自分の目で他者のすばらしい働き方を見て学ぶことは、仕事の難しさを肌で感じている場合には特に大きな効果をもつであろう。アルバイトと正規雇用された社員・職員とでは仕事の内容も責任も異なるであろうが、アルバイト先でよいモデルに出会えることは、就職後の仕事への構えに良い効果をもつと考えられる。

4. 父親をモデルに挙げた3つのケースの比較検討

前述のように父親を単独でモデルとして挙げた3名のうち、2名は女子であった。また両親ともにモデルとした2名のうち1名は父親から大きな影響をうけている。これらの女子3名については、父親をモデルと認知し大きな影響を受けている点では共通しているが、父親との関係の様相はかなり異なっている。そこでこの3例を取り上げてモデルとしての父親の在り方を比較検討していく。

Bのケース：挑発－挑戦型

父親は大学入学時から教職をとることは知っているが、教員を含めて公務員が好きではなく、一般企業に就職することを勧める。公務員を好まない理由は分からないとのことである。母親はほとんど何も言わないので、父親の意見が中心になるという。本人の意思に任せるという親が多い今、強い勧めではないかもしれないが、明確に親の意思を伝えるのは少数派であろう。子どもに対して比較的是っきりものを言う父親のようであるが、それを示すエピソードとして次のようなことが述べられた。父親はセールスという接客の仕事をしているが、Bに対して「おまえは気を

使えないから、接客はできない」と言ったという。父親が本心から「気を使えない」と思っているのかどうかは不明であるが、セールスの成績が良いという自負がそう言わせたのであろう。

モデルになる人を尋ねた時は、「何だかんだ文句を言われるけど、やっぱりお父さん」と答えている。どういうところからそう思うのかを尋ねると、「仕事に責任をもっている」、「店長をしているが、成績を上げて転勤できたと聞いている」、「実力がある」、「仕事を楽しんでいる」と述べ、「いろいろ文句を言われるけど、言うだけのものをもっている」と思い、「尊敬している」とのことである。父親の休みが平日だったので子どもの頃は遊んでもらった記憶がなく、いつも仕事をしているという感じだったそうだが、父親は「子どもにも責任をもっている」とBは受け止めている。

このようなことから判断すると、Bにとって父親は大きな山、あるいは壁であり、立ち向かう相手、いつかは乗り越えたい対象となっていると思われる。大きな壁ではあるがそれに対して立ちすくんでしまう関係ではなく、立ち向かうことで自分を成長させてくれるような存在となっている。それは、父親から「気を使えないから接客はできない」と言われたことに対してBがとった行動によく表れている。父親のこのことばに“ムカついた”Bは今年からコンビニでアルバイトを始めたという。コンビニでのアルバイトはトレーニングを受けた時はやるべきことが多くてできるだろうかと心配したらしいが、やってみたらできたし、いろいろなことを知ることができて楽しいと述べている。高校で生徒会長をやり、「特に職種の希望はない。何でもできそうだし」、「適応能力はあるから、どの仕事に就いても楽しいと思えそう」と述べていることから、Bは自己効力感をもった積極的な人物と思われる。このような自己効力感の高

さが父親からの「否定的な評価」に対して委縮したり自信を失ったりするのではなく、実際の行動で否定的な評価を覆そうとする対応の仕方をとらせるのであろう。それをうまくやり遂げる自分を認識することでさらに自己効力感を高めていると思われる。父親はBの性格を知った上で意図的にこのような態度をとっているのかどうかはわからないが、Bの職業意識や仕事能力の向上に対して父親は大きな役割を果たしている。

Bは、いろいろ文句を言うだけの実力をもっている職業人、社会人としての父親の力や仕事への意識を認めている。反発をしながらも頼り甲斐のある存在ともなっている。将来就職活動をした場合にアドバイスをくれることを期待する一方で、「就活がうまくいかなかったら、イライラを親にぶつけよう」と述べているように、イライラをぶつけてもそれを受け止めてくれる存在として父親をみている。近年子どもと対立しない物分かりのいい父親が増えてきたと言われる中、このように反発しながらも乗り越えたいと思わせる父親は珍しいかもしれなが、父親のあるべき形の1つであろう。父親はBに“文句”を言って挑発し、Bはそれに挑むことによって自分を成長させていることから、Bの父-娘関係は、挑発-挑戦型と言えるだろう。

Jのケース：保護-依存型

自分自身の経験から小学生の時からカウンセラー志望で、中学校、高校と基本的には一貫していたが、大学に入ってから一般企業も考え始め、今はとても迷っている状態だという。一般企業を志望するようになったのは、一つには大学入学後すぐに始めたアルバイト(店員)をしていく中で社員の人たちが働き甲斐をもっており、また職場の人間関係がよいため、自分の意識も高まってきて仕事に就くことがすてきなことだと思ようになったことを挙げている。もう一つは大学入学後

の学業成績が自分の予想していたレベルになく、カウンセラーへの道が厳しいものになってきたことである。このような状況で一般企業への就職という進路が浮上してきた時に、父親が勤めている会社のような企業に就職することが魅力あるものになってきたようである。

父親の会社について、「会社としてすごくいい会社」と繰り返し称賛している。会社のお祭りのイベントに小さい頃から何回も参加し、すごく楽しいという経験をしてきたことが高い評価の1つの要因である。また企業に就職していく先輩の話を聞いていろんな企業を比べてみると、父親の会社が“目立っていい”と思うという。父親の会社の社員の人たちはほとんど有名大学出身者であり、Jの表現では“レベルが高い”人たちなので、良い会社を目指して「戦うのがちょっと難しいところもあるのかなって感じがどうしてもしてしまって、ちょっとだから悩んでるっていう感じ」だという。「一般企業だったらほんとにいいところがいい」ということである。母親も「お父さんの会社に入れたらもう上出来だね」と言っており、母娘ともに父親の会社をひじょうに高く評価し、そこへの入社を憧れとしている。会社のイベントに参加したり、会社の人とも顔見知りで、また新入社員名簿をみてその多くが有名大学出身であることも知っており、父親の会社に強い関心をもってJ自身はかなり関わっている。またカウンセラーという進路に関しても、父親の会社のカウンセラー(非常勤)の方から話を聞く機会をもったり、父親もJに対してとても協力的な態度である。J自身も「お父さんはけっこう会社のこととか調べてきてくれたりして、協力的です。気にしてくれて」と述べている。

Jの家族は両親ともにコミュニケーションが常にとられており、本人も「すごいサポートしてくれる家族なので」と言うように、物

理的にも精神的にもJへのサポートが大きい。進路に関してもその都度ずっと相談しながら考えてきたということである。日常生活でも、Jの帰宅が遅い時でも、食事をするJのそばに母親がおり、「一人で夜ごはんを食べる経験はほとんど今までない」ということである。進路に限らず生活全般において両親とJの結びつきが強い。

「両親はほんとに人間として尊敬している」と述べ、進路を決断する必要がある時には優柔不断なので自分で決めることは多分難しいと予想し、両親と徹底的に話し合うという。自分で決めた進路を親に相談して理解や意見を求める、あるいは両親の意見を参考にして最終的には自分の意思で決断しようというのではなく、自分である程度の方向性をきめることなく、“どうしよう”という形で親を頼っている。このような両親への全面的な尊敬と依存は次のような語りによく表れている。

「自分の意思もそうですけど、自分の意思はもうけっこう考えすぎてわかんないところがある感じがして、まあ両親と話して導いてくれる方向に行くのかなって思います。何だかんだそうなんですよ。両親が導いてくれる方向に行く傾向があるんで。」

「両親が言ったことに従って損したことはない、間違ったことがないということと、私よりも私のことをわかってくれてると思うんで」

「どういう方向に行ってもわりと両親がいんじゃないって言ってくれるとそれだけで安心な部分があるんで。話し合ってるっていう感じですね」

自分の体験からもすごくいい会社だと感じ、また社会的な評価も多分高いであろう憧れの会社で、有名大学出身の有能な人たちを部下にして、ハードな仕事をやり甲斐をもってテキパキとこなしている父親は全面的な尊敬の的である。以前から事ある毎に親に相談し、父親もとても協力的に必要な情報や判断

を与えてくれる。このような中で自分のことをよくわかって受け容れてくれているという全面的な信頼感が形成され、これまでも親の導く方向に間違いがなかったという安心感がある。相談するとは言っても、親のアドバイスも受けて最終的には自分で決断するという形ではなく、親が導いてくれるのを期待している全面的な依存傾向が強い。したがってJの父-娘関係は、保護-依存型といえよう。

Nのケース：行動提示-目標型

Nの進路選択そのものへの父親の影響はないが、父親を仕事をしていく上でのモデルとして挙げている。以下に述べるように、父親との特殊な関わりの中から父親の仕事への構えや仕事仲間からの父親への評価を見聞きした結果、自分の仕事とは異なる仕事をしている父親であるが、見習うべき対象となっていたケースである。

Nの父親は全国でも数少ない職業をもち、全国を回って仕事をしているが、Nは2歳頃から父親の泊りがけの出張にも連れられていた。Nは4人姉妹の3番目であるが、上の姉とは歳が離れているため、父親はNと妹の2人には優しいお父さんで可愛がってもらったということである。妹は身体が弱かったため、父親の仕事について回ったのは主にNだったという。学齢期になっても長期休みには付いていたり、父親の代わりにお客への応対もしたということである。

仕事に対する考え方や生き方で一番影響を受けた人、モデルになる人を尋ねた時は次のように答えている。「仕事の姿勢に関してはやはり父親から一番影響を受けているのかなって思いますね、やっぱり仕事に対する姿勢とかを自分の目で見てきたというのと、それと一緒に周囲の同僚の方からお話を聞いたりとか、あと母から話を聞いた時にやっぱりそういった面が強いのかなというふうには思いますね」

父親が仕事をしている姿から学んだことについては、「父は有言実行というか絶対こう決めたことは絶対最後までやり遂げるというふうな面があるので、やっぱりそれは自分の言ったこと、発言したことに責任をもってるということもありますし、自分の仕事にプライドがきちっとあるというか、誇りをもって取り組んでいるという姿をみていて、やはりどんな仕事に就くにしろちゃんとその仕事に就いたからにはきちんと誇りをもって自覚をもって取り組んでいけたらいいかなあと思ってますね」ということである。幼児期から一緒について歩いているので、「気が付いたときにはすでにかっこういいなあと感じていたように思う」と述べ、知らず知らずのうちに父親への尊敬が形成されていったという。今も全国から「来て欲しい」という電話が掛かるのをみて、「自分の父ながらかっこういいなあと思って」という。

進路に関しては大学進学前にどうするかを聞かれたとのことであるが、基本的には本人が進みたい道を応援する姿勢だということである。父親が幼い頃からNを仕事に連れて歩いたのも跡を継がせるつもりがあったわけではなく、実際父親からそのようなことを言われたこともそのような意図を感じ取ったこともないという。本人は中学の頃から一貫して福祉・臨床分野への志向性をもっていた。福祉関係の中では具体的に目指す職業の変化はあったが、その都度志望理由はひじょうに明確であった。大学での福祉関係の実習を契機に明確な目的意識をもって福祉職の公務員に的を絞っていった。Nにはこのように主体的で強い目的意識や高い意欲がある。その目標に向けて努力するであろうと家族もNを信頼していたと思われる。姉たちも公務員試験の問題集をどっさり買い与えるなど、家族全体の精神的、実際的なサポートがみられる。

幼児期から父親の出張について全国を回るという特殊な関係の中で、父親の仕事振りや

他者からの評価から“かっこういい”という尊敬の念が形成され、それがその後も一貫して持続している。大学生になり自分の進路を決めたり仕事をするということをも自分のこととして考えるようになった時に、定年後も全国から仕事の依頼がくるのを見て父親の実力や仕事への構えを改めて認識し、憧れの対象から職業人として目指すべき目標となっていくと思われる。父親を悪く言うのは許さないという母親の明確なしつけの方針もあり、思春期にも一貫して父親への尊敬は保たれていた。“親の背中をみて子は育つ”という形を典型的に表しており、直接的にことばによる教育はなく、父親の仕事振りを幼い頃から見聞きすることによって仕事をする上での明確なモデルとなっていくケースである。このように、Nの父親は自分の働く姿をNに見せ、それを通してNは父親を尊敬し、職業人としての目標としていったことから、行動提示－目標型といえよう。

3つのケースの比較検討

以上取り上げた3つのケースはいずれも父親を仕事をする上でのモデルとして挙げているが、父－娘の関係やモデルとしての形は三者三様である。

Bの場合は、父親は直接Bに“文句”を言い、Bはそれに反発しながらも父親の実力を認め、仕事への構えを高く評価している。自分の業績への自信を背景にBを挑発して育てるという父親像がみられる。挑発する裏にはBがそれに応えるであろうというBへの信頼があるのである。実際、Bは積極的で自己効力感も高いことから、父親から“文句”を言われることによって自信を喪失させることなく、また父親に反感をもつこともなく、逆にそれに応えて見返したいと新しいことに挑戦し自分の能力を高めている。

Nの場合、父親は特別に教えたり指示を与えたりするわけではなく、また特別に相談相手

になってきたわけでもない。自分が働いている姿を身近で見せていただけである。それも意図的に見せるというよりもNを可愛がって連れて歩いたということらしい。その様子から学ばせるだけの力を父親がもっていたと同時に、学ぶ眼をNがもっていたということであろう。進路に関して主体的な目的意識をもっているNなので、父親から学んだものを自分の仕事の中で適切に置き換えて、自分の目標としていると思われる。

Jのケースはそれと対照的と言える。父親だけでなく母親も共にJに対して手厚くサポートしている。中学校でも進学校であった高校でもJ自身負けず嫌いと言っているように勉強、部活、習い事でギリギリの頑張りを続けてきた。そんな中で自信を失ったり心身の疲労が重なったりしたであろうが、そのようなときはいつでも両親と相談し、やさしく守られてきたようである。とてもいい会社でハードな仕事をこなしている父親は以前から憧れの対象であったが、進路の1つとして一般企業を考えるようになってから、周りの先輩たちが就職していく企業とは比べ物にならないものとして、父親の会社への憧れがさらに高まったように思われる。「企業だったらほんとうにいい会社がいいと思ってる」というように、実際に就職可能な企業を想定して企業への進路を考えているのではなく、父親の会社の有名大学出身のOLがバリバリと仕事をこなしている姿を自分に重ね合わせているところがうかがえる。

BやNがまだ遠いけれど到達すべき、また到達できるであろう姿として父親をとらえているのに対し、Jの場合は到達したいけれどできない憧れとして父親をみているのではないだろうか。BやNは父親をモデルとして尊敬しながらも、仕事をする自分を父親と対等の存在とみなし自分の進む道を主体的に選んでいる。それに対し、Jは“親が導く方向に進んで間違いはなかった”という全面的な信

頼感を持ち、親の判断に依存して進路が決まることを想定しているのである。

IV 考察

1. 仕事をする上でのモデル

14名中10名が具体的な人物をモデルとして挙げた。様々な人物が挙げられた中で父親を挙げたケースが4名でもっとも多かった。仕事をする上でのモデルを求めたので、面接対象者に女子が多かったにも関わらず母親よりも父親が挙げられたと考えられる。母親も何らかの形で働いているケースがほとんどであったが、パートタイムという形態であるためモデルとなり難かったと思われる。4名のうち3名に共通していたのは、多忙な中で責任感が強く、誇りややり甲斐をもっており、仕事の実力があるという父親を尊敬している点であった。

廣瀬・高良・金城・廣瀬(2006)は、保育士・幼稚園教諭養成学科の短大2年生を対象に、短大入学前と入学後のモデルの有無と仕事への態度との関連を検討したが、入学後のモデルがある場合は、「社会の一員として認められるため」、「地域や社会に貢献するため」という社会志向的な仕事理由を挙げるものが多く、仕事の理由の形成に父親が影響を与えたとする割合が高かった。これについて、廣瀬らはモデルが存在する学生は職業が明確にイメージされ、家庭でも父親とのコミュニケーションが多くなりその影響で仕事の理由も成熟したものになる可能性があるとして述べている。このように父親とのコミュニケーションを通して父親の考え方の影響を受けることも十分考えられるが、働く意識が明確な者は直接的なコミュニケーションとは別に、職業人としての身近なモデルとして父親をより強く認知しその言動から働く構えを学んでいくことも考えられる。

2. 青年の親子関係と職業意識との関連

Lopes,E.G. & Andrew,S. (1987) は、職業決定不能が、親と青年の過剰な相互関与によって個体化のプロセスが妨げられることによって生じると述べている。職業決定不能が、親子分離による家族不安を軽減し、家族システムの葛藤を回避する機能をもつという。Jのケースはこの状態に当てはまるのではないだろうか。Jは、これからも実家にいたらと言われ、一人暮らしをする積りがないので、生活のために仕事をするというイメージはないと述べているように、物理的にも親から分離する積りがなく親も分離させるつもりがないようである。前述のように、心理的にも親によい方向に導いてもらうことを期待しており、自己決定には不安があるようである。

Grotevant,H.D. & Cooper,C.R. (1985) は、家族関係における相互作用のパターンと青年のアイデンティティの発達との関連についての研究において、青年がアイデンティティを発達させ個別化 (individuation) するためには、個別性 (individuality) と結合性 (connectedness) の 2 つが必要であるという。個別性は自己と他者の区別の表明である「分離」と自己の見解を明確に表明する「自己主張」の 2 側面をもつ。また結合性は、他者の見解に敏感でそれを尊重する「相互性」と他者の見解に開かれておりそれに応答する「浸透性」の 2 側面を考えている。実際のコミュニケーション場面でのこれら 4 種の発言を大学生のアイデンティティの高さとの関連をみたところ、次のような結果であった。男子については、父親から息子への相互性の高いことと分離の少ないことが息子の高いアイデンティティと結びついていた。しかし女子については、逆に分離の多いことが娘の高いアイデンティティと関連していた。しかし同様の研究を行った平石 (2000) ではこれと異なった結果が得られ、父親から娘への分離の発言は娘のアイデンティティの高さとネ

ガティブな相関関係を示した。Grotevant,H.D. & Cooper,C.R. (1985) との結果の違いをもたらした原因の一つとして、平石 (2000) は文化的要因を挙げている。すなわちアメリカでは自己主張が求められるため個別性が尊重されるが、日本では自己主張が疎まれ結合性が尊重されるため、それが親子関係観に反映しているという解釈である。と同時に平石 (2000) はこのような価値観は個々の家族によって多様であるため、家族内での適合性が重要かもしれないとも述べている。Bのケースは Grotevant,H.D. & Cooper,C.R. (1985) と一致する結果と考えられる。父親から言われる文句がどのようなものかはわからないが、心配りができないから接客はできないと言われたということから考えると、自分自身と比べてまだまだ未熟であることを指摘するような内容と推察できる。これは自分とJとの違いを表明する「分離」であり、Jへの見解をはっきり表明する「自己主張」である。J自身もこれを受け止めており、このような個別性がJと父親の間には存在するといえる。一方で何だかんだ言われても尊敬できる父親であり、子どもにも責任をもっているJが認知していることから、結合性もあると言える。Jはまだ進路を 1 本に絞ってはいないが、決定不能の状態ではなく、これから進路を決定していける見通しと自己効力感ももっており、アイデンティティはかなり高い状態にあると考えられる。このようにJのケースでは個別性と結合性がアイデンティティと結びついている。もちろん平石 (2000) が述べるようにこのような父-娘関係が娘のアイデンティティを高めるかどうかは個別のケースによって異なるだろう。父親の文句が娘を委縮させてしまうことも十分あり得るのである。

Wolfe,J.B. & Betz,N.E. (2004) では、女子学生のコミットメントへの恐怖 (職業決定不能) は母親との良好な関係とは負の相関を示したが父親との関係は関連がなかった。また

高橋 (2008, 2009) でみられた親子のコミュニケーションとアイデンティティとの関連も弱いものであった。しかし本研究でみてきたように、父親は女子学生の職業意識に大きな影響を与えている場合があり、しかもその影響はそれぞれのケースによってかなり異なったものであった。本研究で扱ったケースは少数であり、また父-息子のケースは扱えなかったが、質問紙調査では見落とされてしまう個々の親子関係のパターンを示すことができたといえよう。

引用文献

- Grotevant, H.D. & Cooper, C.R. (1985). Patterns of interaction in family relationships and the development of identity exploration in adolescence. *Child Development*, 56, 415-428.
- 平石 賢二 (2000). 青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識, アイデンティティとの関連 家族心理学研究, 14, 41-59.
- 廣瀬 等・高良 美樹・金城 亮・廣瀬真喜子 (2006). 短期大学生の進路に関する研究-働く人のモデルの有無が進路に及ぼす影響- 琉球大学教育学部紀要, 68, 191-204.
- 上村 和申 (2005). 大学生の就職活動における両親の影響に関する一考察 政治学研究論集 (明治大学), 21, 35-54.
- 北原 佳代・佐々木美樹・岡部 恵子 (2005). 職業選択に対する学生の考え方と親への相談状況との関係-新入生を対象にして- *Bulletin Tsukuba International Junior College*, 33, 121-139.
- Lease, S.H. & Dahlbeck, D.T. (2011). Parental influences, career decision-making attributions, and self-efficacy. *Journal of Career Development*, 36, 95-113.
- Lopez, F.G. & Andrews, S. (1987). Career indecision: A family systems perspective. *Journal of Counseling and Development*, 65, 304-307.
- 鹿内 啓子 (2012). 大学生における親との関係と職業未決定および就活不安との関連 北星学園大学文学部北星論集, 56, 1-11.
- 高橋 彩 (2008). 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 16, 159-170.
- 高橋 彩 (2009). 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 17, 208-219.
- 高井 直美 (2001). 大学生における親の価値の継承 京都ノートルダム女子大学研究紀要, 31, 147-156.
- 田中 宏二・小川 一夫 (1985). 職業選択に及ぼす親の職業的影響-小・中学校教諭・大学教師・建築設計士について- 教育心理学研究, 33, 75-80.
- 牛尾奈緒美 (2005). 大学生の就職活動と親子関係: ジェンダーを視点として 根本 孝・牛尾奈緒美・永野 仁・木谷 光宏 大学生の就職活動に関する調査研究 第2章 明治大学社会科学研究所紀要, 44, 103-116.
- Wolfe, J.B. & Betz, N.E. (2004). The relationship of attachment variables to career decision-making self-efficacy and fear of commitment. *The Career Development Quarterly*, 52, 363-369.

[Abstract]

An Interview Survey of Parent-Adolescent Relationships and Career Decision-Making of College Students

Keiko SHIKANAI

This study investigates patterns of parent-adolescent relations to promote or to retard career decision-making of college students. 10 female students and 4 male students were interviewed about their career choice, reasons of their career choice, and attitudes of their parents to their career choice. For three female students cases, relationships between them and their fathers are very different from each other. The first type is named Provocation-Challenge Type. In this type, the father expresses a complaint about his daughter and the daughter tries to improve her ability. The second type is named Protection-Dependence Type. The father gives full support to his daughter and the daughter places full reliance on her father and depends completely on him. The third is Role Model-Modeling Type. The father gives his daughter the true image of a worker and the daughter follows her father's example. Provocation-Challenge Type and Roll Model-Modeling Type promote independent career decision-making of daughters, whereas Protection-Dependence Type causes career indecisiveness of daughters.

Key words : College Students, Father-Daughter Relationship, Career Decision-Making

